



日夏耿之介著

明治文學襍考

梓書房版

昭和四年五月五日印刷
昭和四年五月十日發行

明治文學樞考 金參圓貳拾錢

著者 日夏耿之介

發行者 東京市神田區北甲賀町四番地
坂口保治

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十七番地
白井赫太郎

發兌

東京神田區
北甲賀町四

梓

書房

發賣

東京神田區
錦町一ノ九

文

修堂

電話神田二七七五番
振替東京七八六四番
電話神田三五九三番
振替東京五八七二番

敍言

日本近代文學史研究ノ途上折ニ觸レテ物セシ詩歌戲曲小説ニ係ル小論ノ類ヲ蒐メテ一卷トナシヌ。予ガ研究ノ第一部ハ、此年明治大正詩史上下二卷トナリテ上板ニ及ビシガ、小説戲曲批評ノ各部逐次刊行ノツイデツイデニ、此類ノ詳畫的論集ヲ隨時發市シ、兩種相携ヘテ、庶幾クハ近代日本藝文考索ノ全景ヲシテ完カラシムトス。

昭和四年三月二十五日午前一時半

日夏耿之介識

明治文學襍考目次

目次

叙言

明治煽情文藝概論	三
家庭文學の變遷	五
蘆花と芥川と左右田へ	一七一
怪談牡丹燈の源流	一七九
『天人論』の著者	一八三
當代の讀書趣味	一八九
新體詩創始とその背景	二四三
譯詩回顧	二六三
本邦に於けるロゼッティ	二七七
詩評家としての高山樗牛	二八七

明治文學の一古典書	三三三
忘れられたる明治佳詩	三四七
上田敏の譯詩に就て	三五七
ヴェクトオリヤ文學輸入閑話	三七九
紀季文學輸入閑話	三六九
新詩史上森林太郎氏の立場	三九七
自然主義的なる詩歌の發生	四一五
日本詩歌の變遷	四三三
一葉の日誌文學	四五二
嗜讀傳發端	四六三
挿畫 附記	四九六

圖版目次

德富蘆花「黒潮」原稿……………對頁 九六

牡丹燈籠狂言錦繪…………… 一〇

上田敏譯詩未定稿…………… 三五

題 簽……………阿藤伯海氏

明治文學襍考

明治煽情文藝概論

——大衆文藝の種類變遷及藝術價値並藝術小説の通俗價及非藝術性——

名稱の詮議

以前は通俗小説と云つたが、近頃では多分作家側から稱へはじめて大衆小説、大衆文藝といふ。ポピュラーといふ言葉には善惡二種の意味がある。ピープルと語源を等しうする事實から推測しても考へられる通り、いはゆる民衆的のといふ程の意味と、も一つは、民情に媚態を呈したが、るといふほどの意味である。辭書によると英譯ブルタルコス英雄列傳のカイウス・グラックスの條に於けるポピュラーの用語例がそれであるといふ。

そんな詮議は何れにしても、今日のわれらの用語例及び語感から考へて、このポピュラーの譯語として普通使用せられる通俗云々といふ語を聞けば、價値低下の感情の方が良い意味よりも強

い。民衆的云々といつても、如何に合理的立場を與へて考へても、ともすると（かの文化云々と等しいやうに）反語的に安つほいあくどいもろい粗雑な一夜漬の即製品を指したがらる。民衆藝術といへば、ロマン・ローランの翻譯が背景を與へる以上に實際の郷土提供品から來る聯想で通俗的なる、腰を下しすぎたる、お粗末なる小説やら繪畫やら演劇やらを漠然と考へたがる。民衆詩人といへば、拙劣な、お粗末すぎる、無知で、無反省で押しばかり強い「小説家以前」の下端文士を聯想する。根本の語義から考へて定によりしくない聯想ではあるが、これ又現實の郷國の提供品が正しくさうなのだから、この聯想には現在のところ一理も二理もあるといはねばならぬ。

一頻り叫ばれた民本主義や民衆藝術が下火になつたのは飽き易い民性のためのみではなくて、その表看板をかゝけて専門家面をして突ん出た連中にそも／＼藝術價が缺ける處が餘りに多すぎたからである。文化主義に清新にして高雅、思索的にして穩當なる思想上の本質性のひどきを感じたのも束の間であつたとひとしく、民衆云々の形容に一味の斬新を感じたものも、忽ち又失望を感じて退いたのは、一にこの自稱専門家輩の愚劣に基くのである。更に進んで云へば、民衆一般そのものゝ教養人としての資格の低劣に基くのである。

そこで、右のやうな語感を避け民衆文藝の名辭を忌んで、大衆云々としたは賢いけれど、畢竟これは名目の上の詮議で内容の吟味ではない。否、若干のその方面では新企圖が現在多少は視はれるけれども、大勢から見てそれ程とり立てゝ論議すべきほどの新味はない。若しありとすればそれも今日只今以後の問題である筈だ。(大衆といふ語は、漢譯佛典中の善男善女の一群を聯想せしめる點で、當體尊重の旨には叶ふと云はれよう。)

が、民衆にしても大衆にしてもそれらの文藝が、在來の名稱で通俗文藝に屬するものであることは、今日の狀態から見て事實である。その通俗すなはちポピュラーなる言葉に二様の義があるとききに云つたは、詮するに所謂通俗文藝の内容にも亦右の兩種があるといふ事に外ならぬ。

さて、更に又煽情云々の語を査べて見よう。これは近く、東西煽情文藝云々のごとき坪内博士の用語例もある通り、一部の人には用ひられてゐる言葉で、煽情小説はすなはち昔淚香の口辭にした Sensational Novel の譯語であるが、大衆云々が對衆の質量から命じた名稱であり、通俗の語が對象の容積とその質の低下とを示唆する名稱であるかの如くに感ぜられる言葉であるに對し、煽情はセンセイショナルにして、それ自らの特質を最も端的に熾烈に云ひあらはした言葉で、こ

れ又センセイシヨナル即質の低劣といふ聯想が必ず伴ふものあるは止むをえない。

しかし、煽情的なるもの穴勝ちに悉く質の低下を意味するとは云はれない。こゝにもいはゆる通俗小説の妙味が含まれてゐるものである。すなはち、所謂エ・スリー・デイズ・センセイションにすぎないのか。永久のセンセイションとも云はるべきものを持つてゐるのかといふところに最高の意味のセンセイシヨナル・ノゾルの價值批評の坎所があるのだが、事實はその様な高所を目差してゐるのではなく、凡そセンセイシヨナルなる文學中の藝術的要素を索訊して見る事にすぎないのである。而して、民衆的大衆的なる通俗小説が、凡べてセンセイシヨナルなる要件を常に殆ど唯一の目的として、場面の轉化、人物の種類、題材の目新しさ等に腐心するが故に、又、民衆的大衆的若しくは通俗的といふ如き性質指稱にも、煽情的といふ形容に於て一層概括的に本質的説明が可能であるを思ひ、此場合此語を假用する事にしたのである。

煽情文藝の種目

先づ明治文學史を縦斷してこゝに所謂煽情的なる文學の分野を明らかにして見よう。

あらゆるセンセイショナルなる文學が、畢竟何等かの意味でキュリオシティ・ハンティングを一圖に直截に目的とする事は明白であるが、その廣い意味のキュリオシティの種類によつて煽情文學にも異同がある。たとへば、冒險小説といひ、探偵小説又は犯罪小説といひ（この兩者を一視するは不當であるが今の日本では殆どそれが同一種に考へられてゐる）家庭小説といひ、立志小説といひ、戀愛小説といひ、少女小説といひ、悲哀小説といひ、撥鬢小説といひ、傳奇小説といふ、これらのさまざまの名目の中には、當然合併せられるべきものも交つてゐるが、多くのやうな名前で在來呼び慣はして來たものゝ大部分は總じてセンセイショナル・ノエルである。

（二十五年の交、センセイショナルを又懐動とも譯し、
涙香は懐動小説とも稱し、懐動小説といふ作者もあつた）

が、たとへば戀愛小説といふ名目の如き、如何な高級の藝術小説とて戀愛が作の感覺中樞になつてゐる時は、他の藝術小説の、社會的關心を生命とせる社會小説に對して、これは戀愛小説であるには相違ないのであるが、煽情小説種目に於ける戀愛小説とは、例へば殊更に「戀愛小説血染のハンケチ」といふごとき割註をあたまに被らせた程度の戀愛實感のキュリオシティを必要以上に極端にあくどく誇張したものを指すのである。従つて、右の悲哀小説とか冒險小説とかいふ種

二 探偵小説

探	外	戰	怪	犯
偵	交	時	奇	罪
實	奇	探	小	小
錄	譚	偵	說	說

作(譯)者

山	長	德	伊	森	千	水	江	二	榎	菊	遠	黑	水	菊	宮	武
田	田	富	原	澤	原	田	見	葉	本	亭	藤	岩	田	地	崎	田
美	偶	蘆	青	德	伊	南	水		破	笑	丸	淚	南	幽	來	櫻
妙	得	花	園	夫	吉	陽	蔭	生	笠	庸	亭	香	陽	芳	城	桃